
リリカルマジカルSFでGO！

志朗兜田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルマジカルSFでGO！

【Nコード】

N9827S

【作者名】

志朗兜田

【あらすじ】

地球から人類が脱出してだいぶ時が経った頃。

魔力と呼ばれる不思議な力が使える星で、人類は新たな社会を形成していた。

第二章から

魔法使いの少女のボディガードを任されたMUNFの軍人、米倉・

J・主水^{もみづ}は、勇者と名乗る誘拐犯から、魔法連盟公認アイドル、ロイズの救出作戦中に謎の光に包まれる。

目を開けるとそこは異世界で・・・恋と魔法と硝煙の冒険譚、開幕。

よくわかる！魔法使いの歴史（前書き）

本文はより読みやすい文章にするために予告なく改稿することがあります。

初投稿ゆえお見苦しい点が多々ありますがご容赦いただきますようお願い申し上げます。

よくわかる！魔法使いの歴史

プロローグ

【魔法使いに必要なこと】

さて、魔法使い或いは魔女と聞いたとき、諸兄は何を思い浮かべるだろうか？

黒いマントと三角帽子、手にはマジカルステッキと空飛ぶ箒、そして傍には使い魔　これがもつとも一般的であろう。

ではここに現代の魔法使いに必要なとされる3つの要素を上げよう。

一つ。学力。

かつて世界を動かすエリートとして君臨した魔法使いは、膨大な専門知識と大学を首席で卒業できる高い頭脳が必要とされていた。

元々魔術といったカテゴリーは存在せず、人類の叡智といえば科学技術であった。

しかし惑星着陸と同時に未知の病原体によるバイオハザードによる人口減少、本来の計画を外れた長期航行と設計時のミスによる想定外の時計・カレンダー機能の計算限界がメインサーバーの機能を停止に繋がり、省資源の為にすべてデジタル化されていた科学技術を閲覧することが不可能となった。

残された人類が選んだ道は、現存する科学技術の維持と後述する使い魔との共存と魔法による新たな社会の形成であり、魔法使いこそが社会の中心的役割を担った。

現在は義務教育の中に魔法体系の一部が教養程度に組み込まれており、高校の選択科目で魔法学を選択すれば誰でも魔法使い4級を取得できる。

一つ。使い魔。

かつてこの星の生態系の頂点に君臨し、人類の入植時には積極的に共存を持ちかけて魔術知識を与え、大量の魔法使いを生み出した末に人類を混沌の淵に叩き落とした生物である。

容姿は基本的にネコ科の動物であるが、イヌ科や鳥類、ネズミと言った小動物系も存在しており、すべて人語を理解できる高い知能を有しており、『契約』と呼ばれる行為でヒトの魔力を強化する代わりに、そのエネルギーの一部を摂取することで自らの生命活動及び知性を維持している。

全ての使い魔は「知恵の樹」と呼ばれる魔力を媒体とする巨大なネットワークにリンクしており、魔力場を通じて意思疎通を図っている。

知恵の樹を巡っては人類との戦争の火種になったが現在は和解しており、その愛らしい容姿と高い知能から、魔法使いにとっては歩く知恵袋、またはマスコットキャラとして扱われている。

一つ。容姿。

そして現在最も重要とされているのが容姿である。

かつての魔法使いと言えば容姿など関係なく、とにかく科学技術の代替として頭脳と実力が物を言った。それこそ黒マントに三角帽かぶってようが関係ない。

しかし、世界魔術連盟が行った調査によれば、近年の労働力人口における魔法使いの割合はわずか3%、人口比にして10万人弱と魔法使い人口は減少の一途を辿っている。

理由としては科学技術の復興と、入植地での経済活動がかつての地球と同等レベルまで達したことによるサラリーマンの増加、なにより、大衆の魔法に対する興味の低下であった。

そこで、世界魔術連盟はかつての権威を取り戻すべく、起死回生のある方針を打ち出した。

魔法使いのアイドル化。

数々の波乱を乗り越え、平和が訪れたこの星で、魔法使いはかつての栄光を取り戻すために偶像を作り上げた。

これは、世界魔術連盟と世界科学技術連合体の死闘の記録である。

よくわかる！魔法使いの歴史（後書き）

ジャンルはファンタジーに言ったな。あれは嘘だ。

序章

爆弾解体の話をしよう。

狭い部屋の中、向かいの席に座っている男が唐突にしゃべり始めた。

家族や同僚によく言われるんだ。

「ねえジョージ。どうして雀の涙の手当てでそんな危険な仕事をするの？」とね。そんなの決まってるじゃないか。

僕は、爆弾を解体する時こそが、このしみつたれた人生で最高にハイン瞬間だからだよ。

考えてみてくれ。どこかの悪者が正義に齒向かって道端に地雷を仕掛けたり、可哀そうな子供たちを洗脳し兵士に仕立て上げ、時には人間爆弾にする。

そんな極めてシビアな状況下で爆弾解体をして地域に平和を取り戻す。そんな経験、一体僕の国のどこでお目にかかれるっていうんだい？

だから僕は地球じゃ常に紛争地帯に身を置いていた。お陰で色々な勲章をもらったよ。正直言って充実していた。

遠くから声が鳴り響いている。

でもね、僕は今とても失望しているんだ。確かにこの星では大きな戦争があった。

その後処理として僕が来た時には魔法という、それまでの常識では理解できない厄介な力場が存在するこの星で、新たな知識の吸収は僕にとっては爆弾解体の次に刺激的な出来事だった。

だけど僕と仲間たちが危険を排除した途端、正義の英雄気取りのジヨック共が地球から大挙して押し寄せて成果を奪い去り、地球と同じようにやりたい放題を始める。

命が惜しくて泣きついて来て、用済みとなれば切り捨てる。

僕の罪状を知ってるか？「基地の女性隊員にセクシャルハラスマントを働いた罪」、差別罪だとき。全く、笑わせてくれるよな。

男がゆっくりと立ち上がる。部屋中に鳴り響いていた声はつきりと聞き取れる位になっている。

さて、おしゃべりの途中だがお呼びがかかった。またひと仕事をしてくるよ。そうだ、大切なものはちゃんと金庫にしまっておけよ。

そう言うと男の体が白い光に包まれ、それが部屋全体に膨れ上がり、そして

第一章 魔法使い、旅に出る（前書き）

米倉・J・主水は宇宙軍の特殊部隊に所属するボディガードである！
あだ名はジエームズ・モンド。意味はない！

第一章 魔法使い、旅に出る

1 .

この星では魔法というものは陳腐化してしまっていた。

最初のうちこそ呪文を唱えて魔力を発動させていたが、今となっては手帳ほどのサイズに魔法に関する大抵の仕組みは組み込まれ、適性が無くても魔法力の恩恵を受けられる。

科学と魔法の融合は歓迎すべき事柄であったが、圧倒的な科学力の利便性の前に魔法使いは激減した。

これではマギカ政府内で科学連合に対抗できないというきわめて政治的な危機感を募らせた魔法連盟による魔法使いアイドル化計画に打って出、予想外の大成功をおさめた。

ライブやグッズ収益での莫大な収益もさることながら、高校魔法科進学率は前年比200%増。魔法入門書と試験関連書籍が飛ぶように売れ、世はまさに大魔法時代となり、小学生の将来成りたい職業No.1に輝くまでに至った。

ところが科学側がバーチャルアイドルを投入して対抗すると、魔法対科学の代理戦争の様相を呈してきたのだ。

自然と熱狂的なファンや便乗する不穏分子によって危険にさらされることが多くなり、ついにライブ会場同時爆破未遂事件を機に治安当局の介入を招いた。

爆破未遂事件によって疑心暗鬼状態に陥っている両陣営からの要請により、俺が所属する宇宙軍混成大隊隷下特務部はボディガードを派遣することになった。

だが、混成大隊は魔法と科学に特化した連中のかき集めであり、相互理解を深めるとのお題目を政府が唱えたおかげで、科学側に魔法部隊が、魔法側にハイテク部隊が配備される運びとなった。

自己紹介が遅れた。俺の名は米倉・J・主水。

両親は水資源枯渇による苦難の時代を乗り越えた世代なので「どんな時でも周りの人に水を注ぐような人間になってほしい」という願いを込めて「注水」と名付けたようだが、いかんせん字が汚く機械が「注」を「・J・主」と認識した結果、主水という今や誰も読めない名前になったのだ。

そういう時は再申請するべきだが、「そそみ」よりも「もんど」の方が響きがカッコイイという理由でそのままになった。もちろんミドルネームのJに意味などない。

特務部では昔の映画の主人公をもじって「ジエームズ・モンド」などとあだ名されたが、俺が所属する#分隊での暗号名は隊長の趣味によってさらに酷いものとなっている。

今は言う必要はないだろう。というか、言いたくない。

我々のMUNFの任務は、この状況下で中立の立場を保ちながら平和を維持することだ。

要人警護もその一つ。アイドルの警護も我々の任務だ。

<着信音>

さて、仕事だ。MUNFは君の参加を待っている。詳しくはお近くの軍団司令部人事課へどうぞ

部長から渡された資料通り、音声を録音して返信ボタンを押すと本当に仕事を伝えるために鳴りまくってる端末に手を伸ばす。

電波の入らないコンクリの建物内だろうとお構いなしに通信でき、内臓の小型プロジェクターを使えば即座に移動用魔方陣を描くことができる、まさに魔法の通信機。

画面に触れると呼び出し音が止まり、緊急のメッセージが表示される。

「護衛対象Bロスト。至急ポイント01に向かえ。」

護衛対象Aとは、自分が最優先で警護するアイドルのことであり、

護衛対象Bとは、その使い魔である。

最近では、使い魔がボコボコにされると生命反応が微弱になったと誤認識してこのメッセージが表示されるようになっていた。

どうせまた喧嘩でもしたのだろう。自業自得だ。そう思いながら席を立ち、彼女の部屋に直通しているワーブルームに向かった。

2 .

彼女の部屋にワープをすると、机の上に一通の手紙が置かれていた。

「突然ですが旅に出ます。探すなポケナス。」

実に簡潔な文章だ。一行で我々に対する憎しみが伝わってくる。

溜息をついて机の下を覗くと、案の定、ガムテープでぐるぐる巻きにされたウサギ型使い魔が倒れている。

上に乗ったものを拘束する術式が描かれた魔方陣に見事にかかっている。手には写真集。

こういう時は端末で魔方陣を読み取り、解除用魔方陣を重ね合わせれば、ほら、文字が青い炎となって消滅する。

「ぎゃあああ何すんじゃお前はあああああああ!!!」

絶叫と共にウサギが飛び起きて床を転がりまわる。スプリングクラーが作動して消化。

「お前が何してんだ。今時ゴキブリもこんな畏に引つかからねえぞ。」

端末をベストポケットにしまいながら蹴りを入れると、黒焦げだったウサギの体毛がポフツツという音とともに生え変わる。

「それで、アイツはどこに行った。」

「知るかよ。それより写真集どうしてくれるんだ。丸焦げのびちよびちよで何が何だか判らないじゃないか。」

涙目になって必死にかき集めた紙切れを手に文句を言う。ウサギだけあって常に発情してるこいつにはそちらの方が問題らしい。

「おいピーター、いい加減にしないと実験用のワニの餌にするぞ。」
「いてててつ、わかった降ろせて！あと俺はピーターじゃない
！」

「アイツはどこに行った。」

「知らないって！」

「今日の昼食は豪華だなあ。ワニのクロ子も喜ぶよ。」

「だから本当にわからないんだよ！新しい旅行セットが欲しいとか
言い出したから通販で小型のトラベルパックをそろえたら机の下に
写真集があるって言ってそれっきりだよ！」

耳と腕を後ろに捕んだウサギを机の上に解放してやる。

折角毛並がきれいになったのにしわだらけじゃないか、とブツブツ
文句を言いながら足を踏み鳴らし、ポップコーンが破裂したみたい
な音と共に着替えを取り出す。

「場所の見当はついてるのか？」

「さあね。だが最近妙にそわそわしてたり、ぼーっとしてたからや
ばいんじゃないかとは思ってたよ。」

「またマツサージしてやるとか言っただろ」

「なぜわかった」

「黙れ淫獣」

ウサギが着替え終わるのを待ち、携帯端末から周辺に設置された街
頭監視カメラのデータを検索するが中々ヒットしない。

「おい、知恵の樹で何か見つかったか？」

「ダメだ。こちら辺にいる使い魔に聞いて回ったが見てないとき。」

「服はどうなってる？」

「下着類と普段着がいくつか無くなってる、多分新しいトラベルセ
ットの魔法使い装具一式を持って行ったかな」

すぐにコンピュータの履歴からセットの内容を問い合わせる。服装
は黒の三角帽子、黒いマント、杖、箒……。

「中は白のブラウスに黒のスカート。ローズのことだからミニスカ

ートに改造してるんじゃないの」

「よし引つかかった。該当する服装の人物が一名、街の東のはずれで空間転移魔法を使って出てきたのが観測されてる。」

「いつの間にそんな高度な魔法を・・・！ぼくの言うことをついに聞いてくれたのか・・・！！！」

一人、いや一匹感涙を流して喜ぶウサギ。

「どうやら連れがいるようだ。」

端末を操作し、パソコンの画面に監視カメラの映像を呼び出す。マントの下、ミニスカートから足が除く少女が空中に現れ、それに続いて大柄な男が現れた。

全身に甲冑を身にまとい、大剣を背負った古代西洋騎士とした大男。しばらくキョロキョロと周りを見回したあと、東の街道に向けて歩きだす。

映像はそこで終了していた。

「・・・やっべえ、こんな不審者に引つかかるとかいったい何考えてんだ。」

ぽかんと口を開けて映像を見ていたウサギがひとり言のようにしゃべりはじめた。

「さしずめローズにとってのこの変態マッチョマンは捕らわれのお姫様を救い出した勇者ってところか？」

「脳みそは不思議の国のお姫様でも、アイツは魔法少女だろうが。まったく、容姿だけで赤点コースの奴をよくもまあ天才魔法少女に仕立て上げたもんだ。」

「うるさい、契約するなら美人の方がいいじゃないか！むさいおっさんや野郎なんて死んでも御免だね！」

ギャーギャーと抗議するウサギに旅仕度を整えるよう言いつけ、一度自分のオフィスへと帰還する。

もしあのマッチョマンが科学側の誘拐犯だとすれば、必ずどこかの

拠点に連れ込む。

そうでなくとも、グリズリー州は今でも原生恐竜や魔獣が闊歩する厄介な場所だ。すぐに乗り込むにはいささか装備が足りない。

引き出しのカギをかけ、もしかしたら今回は今までよりも厄介なことになるそうだという予感を抱きながら、武器装備がそろっている出撃区画へと足を向けた。

愛と青春の討伐旅行（前書き）

護衛の主水モンドと使い魔のウサギを出し抜いた魔法連盟の広告塔、ローズ・サンフラワーは自分を助け出しに来たという不思議な魅力を持つ男と共に東の街道を往く。

愛と青春の討伐旅行

彼女、魔法名兼芸名ローズ・サンフラワーことナオミ・マリノスは退屈していた。

有名人になれると聞いて魔法使い検定を受け、類稀なルックスを評価され即広告塔へのし上げられた。

だが、それも3年もすれば徹底的なスケジュール管理の下でひたすらニコニコと笑うのが苦痛に感じ始めていた。

彼女は退屈していた。

2年目の終わり、同時爆破未遂事件を機に警備態勢がより強化され、外出もままならなくなった。

友達との接触も制限され、学校に行くにも家に帰るにも護衛がついて回った。

彼女は退屈していた。

だから、突然現れた自らを勇者と名のる男に心奪われた。

「まだ歩くの？」

息を切らして彼を追う。旅に出てから3時間、見通しの良い街道を外れ、寂れたバラックが点在する村の跡地に入っていた。

空は暗くなり、日没は刻一刻と迫ってきている。

「もう少しですよ私の愛しい人。もう少しで今宵の宿へと到着します。」

「なんだか本格的な旅ね。」

箒を担ぎ直して、小走りですぐに男に追いつく。

「ねえねえ、本当に私の力が必要なの？」

「もちろんですよ。世界を変えるためにはあなたの力が必要なのです。」

男は大仰な身振り手振り芝居がかった口調で語りかける。

そのような仕草一つとってみても、今の彼女には魅力的な異性とし

が見えなかった。

「魔王の復活の時は近い。魔法少女として秘めたる力を持つ貴女が重要な鍵となるのです。」

「学校じゃそんなこと誰も言っていなかったけど」

「おお、神よ。なんと哀れな子羊なのでしょいか。彼らはあなたの力を恐れるあまり、真実を隠蔽したのです。」

貴女は正しきものの中でも最も力ある勇者しか扱えない強大な力を秘めているのです。」

聞いててむずがゆくなる台詞を恥ずかしげもなく言っただけの男に、ローズは夢中だった。

「特にあの使い魔と護衛の男。彼らは世界を牛耳るMUNFが寄越した監視者です。貴女の自由を奪い、力を悪用せんとする悪の手先だったのですよ。」

「本当にそうなのかしら」
確かに使い魔の方は隙あらばセクハラをしたり下着を盗もうとしたり、外見からは想像もつかない淫獣であったが、ボディガードとして派遣されてきた男は

それ程害があるとは思えなかった。特に話をしたわけではないが、わがままを言えば少なからず聞いてくれたような気がするし。

「そうなのです！騙されてはいけませんよ。あの男は凶暴な人格を隠し持っていますからね。貴女の前では紳士を気取っていますが、その実は恐ろしい変態なのです。」

その後、しばらくボディガードの悪行の限りについて聞かされた。地球では元特殊部隊員として死体の山を築き上げ、今も殺人鬼として夜な夜な何の罪もない民間人を殺害し、さらに使い魔と組んで闇市場でローズの私物を売りさばいている、云々。

その間もローズは彼に夢中だった。食い入るように瞳を見つめたり、視線が合えば髪の毛をいじってもじもじしたり。

ガキかお前は。

ハツとして空を見上げる。どこからか護衛の男、モンドのあきれ返った声が聞こえた気がした。

「どうしました」

相変わらず男はニコニコと語りかける。「ううん、何でもないのでびっきりの笑顔でごまかそうとしたその時、それまでハンサムだった男の瞳の奥に底知れぬ暗い闇を見てしまった気がして、急いで顔を逸らす。

「ほら、見えてきましたよ。もう少しで今晚の宿です。」

坂道を越え、男が相変わらず優しい声でローズに語りかける。

眼下には相変わらずバラックが点在してるが、その中でひととき目立つ建物があった。

「到着しました。ここが今晚の宿であり、私と貴女のパーティ契約を結ぶ儀礼場です。」

日没後しばらく歩き、ようやく目的地に着いたと聞かされた彼女は体力的にも限界に近かった。

俯きっぱなしで歩いてきた彼女が顔を上げると、そこには大聖堂を思わせるような荘厳な建物が彼女たちを待ち構えていた。

さあ、my sweet heart、我が腕に収まりください。そう言って男は膝をつき、フードを被せるとローズの体を軽々とお姫さま抱っこの形で持ち上げた。

ここは我らの聖地です。扉の中へと進む。

赤い絨毯を敷き詰めた通路の先に、いくつものベンチが並び、巨大な大樹の像の前、白い大理石で作られた祭壇へと続いていた。

いいですか、彼らは我々の敵なのです。

貴女を守るのは私だけ、そして、貴女は私だけ見てればいいのです………

男の腕の中で、彼の言葉を聞いた。
その言葉はじわりとローズの思考を侵食し、彼女の思考の自由を奪い去る。

そして、今までの自分が見た事聞いたことはすべてフェイクであり、彼が言うことこそがすべて真実なのだという考えに支配され始めていた。

一步、また一步と歩みを進め、遂に祭壇の前に到着し、彼女を地へ降ろす。

フードを取り払われ、改めて互いの顔を見つめ合う。
うっとりとした目つきで彼の頬に手をやり、視線を合わせる。熱い視線を交わした後静かに目を閉じる。顔と顔が互いの息遣いが聞こえる距離に接近しているのがわかる。

私は、彼の、忠実な

爆音

突然横から空気の壁に殴り飛ばされたかのような衝撃を受け、少し遅れて煙に包みこまれる。空気を震わす衝撃が止み、うっすらと目を開けると、先程までいた祭壇は粉々に吹き飛び、がれきの山から煙が上がっていた。自分はずいといと、再び彼に抱き上げられて壁のすぐ傍、入口から死角となるオルガンの影へと移動している。

「敵の襲撃です！奴らめ、もう嗅ぎ付けたのか！」

男の目に怒りの炎が宿り、ゆっくりと彼女を地に降ろす。

「どうやら魔獣どもに感づかれました。ローズ、私の愛しい人よ。

私の為に戦って……」

「その必要はない。」

聞きなれた声。

甘いトークを邪魔された男が怒りの咆哮を上げて突進しようと身を乗り出すと、今度は激しい銃声が鳴り響き、巨大なパイプオルガンが弾丸に打ち鳴らされて悲鳴を上げた。

「散々人をシリアルキラーの変態扱いしやがって、覚悟はできてるんだろうな。」

銃声が止み、パイプオルガンの断末魔の残響の中、恐る恐る物陰から様子を窺う。

入口の巨大な扉は見るも無残にぶち破られ、あちこちに破片が散乱している。

そして扉の枠の中、強力な光を背に浴びた一人の男が立っていた。

「我々はMUNF特務部 分隊だ。直ちに人質を解放し投降せよ。警告に応じない場合は貴様を實力を持って排除する。」

先程までとは打って変わり、漆黒の装備に身を包んだ米倉・J・主水が静かに、だが、はっきりと聞きとれる重い声でそう告げた。

闇の胎動（前書き）

彼は自分の仕事を誇りに思っていた。

紛争地帯を駆け回り、爆弾を次々と処理して平和をもたらすプロフェッショナル。

ある日、当直部隊からの応援要請を受けて紛争地帯をパトロールしていた彼の部隊は敵の自爆攻撃と包囲網の前に壊滅した。

救援部隊が駆け付けた時、彼はかつて部下の一部だった物の傍にたらずみ、静かに医師に問いかけた。

「見てくれ、これが今の科学技術の限界だ。いくら厳しい訓練を重ねて薬物で痛みを無くしても、銃弾一つで簡単に死は訪れる。なあ、俺達は一体何のために戦ってるんだ？」

闇の胎動

鳴り響く銃声と爆発音が周囲の建物を揺らし、爆発音の度にレンガ造りの天井から砂埃が落ちる。

窓際の光が奇妙に屈折し、砂塵が空中で静止した。

部屋の中にゴミを漁りに来た一匹の野良猫が全身の毛を逆立ててその一点を注視し、全身の毛を逆立てて低く唸り声を上げる。

刹那、何かの気配を感じたのか喉から空気を絞り出すような音を出して一目散に逃げ出し、突然全身を激しく痙攣させ、石の様に硬直した。

見えない何かに掴みあげられ、部屋の外へと放物線を描いて飛び、着地と同時に再び体の自由を取り戻して逃げて行った。

「埃っぽい部屋だな。魔法のマントも意味はないか。」

鳥のさえずりのような合図とともに部屋の中にマントを羽織った5人の男が現れる。

3名は入口に立ち、2名は窓際で匍匐^{ほふく}状態を維持している。

男たちの手にはカスタマイズされた自動小銃。

その安価さと過酷な戦場の中でも特に優れた信頼性の高さから世界中の戦場で使用され、大量破壊兵器と呼称されたAK-47を基に木製部品を強化プラスチックへと変更して銃身の過熱から手を保護するハンドガード上部と側面にピカティニー・レールを装備したAK-47PMCカスタム。

現在も生産が続けられる信頼性の高いアサルトライフルだが、彼等が所持しているものはストック部分にこの星独自の木材を使用し、それぞれ紋様の異なる円形の刻印が掘られている。

男の一人が窓際に近づくと、ドラグノフ狙撃銃の光学照準器を覗き込む狙撃手の隣、観測兵としてフィールドスコープを覗き込んだ男が立ちあがり敬礼する。

髑髏ドクロのペンダントを首から下げた男が彼に問いかける。

「連中には相手が魔法だろうが最新兵器だろうが関係ないようだな。」

「確かに寄せ集めの宣伝部隊にしては手練れが多い。しかし陽動には引つかかってくれました。今回のバイトは意外と頑張ってる方ですよ。」

観測兵がバックパックから円筒形の装置を取り出し、半透明の画面を引き出す。

彼が使役する使い魔からの情報が知恵の樹の「裏口」を通じて表示され、聖堂内の映像がリアルタイムで表示されている。

「予想以上の重装備です。奴に渡した装備ではまず勝ち目はありませんよ。どうします?」

髑髏の男が観測兵の顔をまじまじと見る。質問の意味が解らない、そういった様子で問いかける。

「使い捨ての労働力には分相応の対価を払った。それ以上の何が必要だというのだ?」

観測兵が黙ってうなづく。

「よろしい。すぐに撤収の準備を始める。我々の存在を奴らに気取られてはならん。」

戦闘時間3分。最初こそ仕掛け爆弾を作動させて有利に見えたが、MINIMIと次々と投げ込まれるグレネードという圧倒的な火力の前に動きを封じられて自称勇者はなすすべなく倒れた。

弾薬を打ち尽くしたミニガンを降ろし、ふと気配を感じて天井を見上げる。

主水の視線の先、日没後の暗い聖堂の天井に何かがある。

主水はそちらに銃口を向けるが、入口に装甲車が突入した衝撃で照準がそれる。

運転手に文句を言い、再び天井に目を向けるが、すでに気配を感じることができなかった。

歩兵が装甲車から歩兵が展開し周囲の警戒を始める。
その様子を、ステンドグラスの上、採光用の小窓から一羽のカラス
がじっと見つめていた。

崩壊

「久しぶりにしてはまずまずの仕上がりね。」

#分隊長、少佐が装甲車から顔を覗かせて言う。三十路間近だが、戦闘服に身を包んでもその美貌を隠しきれないプロンド美人だ。

なんでこんな美人がMUNFの戦闘部隊の隊長やってるのか常々不思議に思っていたが、噂によれば父親である將軍と喧嘩をしたとか、訓練中に事故を起こしたとか、その色香で数多の士官や将校が虜になり彼女を巡って中央司令部で銃撃戦を繰り広げたとか、とにかく素性は謎に包まれている

それでも指揮官としては中々切れるところがあり、個性の塊である#分隊をまとめ上げ部下からの信頼を得ているのだ。

「少佐、危ないからあんまり顔を出さんでください」と、隣の運転席に座った覆面の男が無線越しに面倒くさそうに言い、口調を改めて周囲に敵影なしと主水に伝える。

「護衛対象、ライフサイン健在。あれだけの銃撃に晒されて怪我一つないとは。」

運転席で統合情報システムを操作している覆面の男、リンドバーグ少尉が感心する。

護衛対象の位置がはつきり目視できない中、相手の動きを封じるために弾幕を張ったおかげで荘厳な聖堂の内部は廃墟と化していた。

『ローズは防御魔法を使えるからね。僕が近くにいれば力を底上げできるし。』

無線越しにバツクバツクに突っ込んで運転席に放り込んでおいたウサギの声が聞こえる。魔法を利用した通信では使い魔が干渉することができるとだ。

『それよりいい加減出してくれないかな』

「少尉出してやれ」

そういつよりも早く、隊長がごそごそとバックパックを探る。

「これかな・・・あ、何このうさちゃん可愛い！」

隊長がキヤツキヤとはしゃぎながら胸に抱いたウサギを主水に見せる。ウサギはといえば「銃声が怖かったよお」などとかわいらしい声をだして顔をうずめている。

年増は嫌いだとか言っていたはずだが、欲望に忠実な奴め。

あきれた様子で少尉が横目で見ていたが、警告音で祭壇の動きに気付いた。

「目標、移動を開始。あれだけ撃たれてまだ動けるとは。」

「隊長、そいつを捕まえておいてください。少尉は周辺警戒を強化、外で動きが無いか注意しろ。ウサギ、合図するまで出てくるな。お前も一応護衛対象だからな。」

「りょーかい」「了解」「グヘエヘ」と返事が返ってくる。最後のは返事と呼ぶには疑わしいが。

とにかく、お次は楽しい取調べの時間だ。

『PS-01・02、周辺警戒を怠るな。残りは隊長の指示に従え。以上。』

歩いている途中、少尉が聖堂の外と上層階に配置した強化外骨格（PS）を装備した隊員に指示を飛ばす。

結局のところ、重武装のPSを連れてくる必要があったのか、そもそも#部隊全員を引き連れてくる必要があったのだろうか。オバーキルもいいところだ。相手が防御魔法を使っていなければ一瞬でミンチにするところだった。

歩きながら電撃銃デイスナーを取り出して自省する。

自分の役目はボディガードであり、奪還の際には犯人を拘束して裏を洗い出す仕事がある。

国家に雇われた殺し屋でもないし紛争地域で活躍する傭兵ではない。今は。

祭壇の上、鎧を粉碎され半裸状態で虫の息の自称勇者は主水を見るなり食って掛かった。

「貴様……！私の愛しい人マイスイートハートに怪我を負わせるとは考えないのか！？」

「お前のじゃない。皆のアイドル人気者だ。」

電撃銃の安全装置を解除して勇者に突きつける。「言え。誰の差し金だ？」

「神より賜りし崇高な使命だ。貴様に」

引き鉄を引く。銃口から針が飛び出し自称勇者の腹部に突き刺さり、本体と針を結ぶワイヤーを通じて高圧電流が流れ込む。

苦悶の声を上げて体が跳ねる。主水が引き鉄を離すと通電は止まり、ぜえぜえと荒い息で突っ伏した。

「もう一度聞く。お前にこの装備を渡して誘拐を唆した奴は誰だ。」

「糞！そうやって白馬の騎士気取りか！お前みたいなやつがローズちゃんを唆していい思いをして」

再び海老ぞりになってのた打ち回る。主水はため息をついて引き金を離す。

「今度は勇者から頭の逝かれたアイドルオタクか。お互い猿芝居はうんざりだろう。吐けよ、楽になるぜ」

「ひ、人の目も見れない奴に話すことなどない……」

「コンタクトレンズに洗脳魔法を仕込んだって訳か。なににせよ本部で話を聞いたほうがよさそうだな。」

蹴りを入れてうつ伏せにし、頭に麻の袋をかぶせ両手を腰の後ろで結束バンドを使って拘束する。

「おいウサギ、もういいぞ」

呼びかけるが返事がない。装甲車の方を振り向くと隊長は何やら通信機で話し込み、ウサギは後部ハッチから顔を覗かせていたメディックを口説いていた。

「ねえねえお嬢さん僕と契約して魔法使いにならない？今ならアイ

ドルになれるチャンスが」

太腿のホルスターから拳銃を抜き、ウサギの足元に鉛玉を叩き込む。
「おいウサギ！遊んでないでローズ探すの手伝え！」

その瞬間、主水の背中がゾツとする感覚が走った。

戦場で、殺気を湛えたスナイパーに狙われている時の感覚
とつさにその場から飛び退く。

主水がいた場所が光に包まれ、激しい炎が一瞬で空間を焼き尽くした。

同時に暗闇の中に気配を感じて銃口を向ける。銃口下部に取り付けられたフラッシュライトが自動点灯し、暗闇の中、涙を流してこちらへ杖を突きだす少女を照らし出した。

「もうやめてよ人でなし！勇者様をこれ以上いじめないで！」
銃口を背け、周囲の気配を探る。

今の殺気はこの少女から発せられた物か？そんな気配、今まで感じたことはなかったのだが。

「大尉どうしました」

「PS-02より#ゼロ、方位270で動体反応確認、至急指示を
求む」

「緊急、緊急。こちらPS-01、大型魔方陣発動の前兆確認、総
員直ちに退避せよ。繰り返す・・・」

「本部より#分隊、現在海兵隊が急行中、ポイント04で合流せよ」

「ローズ何してんの?!」
「危ない、動かないで！」

無線が一気にやかましくなる。

イヤフォンを耳から外し、ローズに語りかける。

「ここにいたのか。ウサギも来ている。すぐに帰ろう。」

「いやよ！その人を離して！」

「こいつは勇者様じゃない。ただの欲望にまみれたケチな誘拐犯だ。」

「違うわ！誘拐犯なのはアンタたちの方じゃないの！」

「ここは危険だ。すぐに出るぞ」

「いやよ」

我が侘もいい加減にしると説教をしようと目を見た時、吸い込まれるような眼をしていることに気付いた。そして、その瞳の奥から再び殺気を感じた。

こいつ、まさか。

「今ですマイスイートハート・・・」

床に転がった男がにやりと笑う不快な感覚。

この場から逃げ出したいのに、体の自由がきかない。

ローズがゆっくりと杖を掲げる。

それに呼応するように祭壇が青白い光で輝き、大地が震える。

ひとり言のようにブツブツと呪文の詠唱を始め光と振動がさらに激しさを増す。

同時に自称勇者がむくりと起き上がり、空中に浮かぶ。

「大尉逃げて！」

少尉と隊長が同時に叫ぶ。

彼女が杖を振り下ろすと足元が崩壊し、視界がぐるりと巡ってこちらへと駆け寄るウサギと目が合った。

一瞬の後、激しい閃光と轟音に包まれ、聖堂は崩壊した。

崩壊（後書き）

「作戦は成功した。」
街を見下ろせる丘の上、両脇に従えた部下たちの詠唱が終り、髑髏の男がつぶやく。

聖堂は音を立てて崩壊し、その中から一筋の光の柱が天へと伸びている。

草むらが光を発し、その中からスナイパーとその観測手がやってきて呪文を詠唱していた部下たちと共に一列に整列する。

「諸君、記念すべきこの日、我々はこの世界を書き換える。この戦いはすでに去った友人と、次世代を担う者たちに捧げるものだ。手始めに、最大の裏切り者の始末から始めよう。」

全員が東の方角を見る。街道の先、グリズリー駐屯地より出動した海兵隊の車列のライトが、これから何が起こるか知る由もなくゆっくりと接近してきていた。

異世界によつこそ

爽やかな風が頬を撫でる。

うつすらと目を開けると、青々とした草原が吹き抜ける風で波打ち、澄み渡る空と純白の雲が鮮烈な色彩を放っていた。

どこか郷愁を呼び起こす光景を見ながらぼんやりと視線を落とす。黒い戦闘服。タクティカルベストの膨らみとグローブに包まれ拳銃を握りしめている右手。

深い水の底から浮かび上がるように、急速に意識が覚醒する。

ここは、どこだ？

素早く頭をめぐらせ、まずは周囲の状況を認識する。

小高い丘の上、大きな木の下にもたれかかっており周りに人の気配は感じられない。

次にここはどこかを考える。

どこかで見たことのある景色だが、確信を持って言えるような場所ではない。

少なくとも戦闘装備でうたた寝をする場所ではないのは確かだ。

ゆっくりと腹式呼吸を行い、思考を整理する。

とにかく、状況がわからない以上はつきりとした現状認識は必要だ。

左手にはめたデジタル腕時計を見る。

日時が文字化けを起こして止まり時計としての役目を完全に放棄している。

仕方なくリセットを試みるが、いつまでたっても標準電波を拾わな

い。

取りあえず時計は後回しにして装備を確認する。D型装備と呼ばれる運動性と火力を重視した装備を身に着けているが、アサルトライフルの弾薬は携行していない。

ということとは、弾薬をたっぷり蓄えたMINIMIを持ってきたはずだが肝心の銃はどこにも見当たらない。

弾薬はタクティカルベストに取り付けたポーチに予備の拳銃マガジンが4つ。腰のホルスターには何も入っておらず、太腿に吊ったホルスターの拳銃は今手にしている。

腰のポーチには救急セットと非常用レーション、それに通信機とインカム類。

通信機の電源を入れる。時計の電波がダメなら魔力で・・・

バチンという音と共にスパークが起こり、画面がブラックアウト。何度か叩いて通常の無線としての機能は復旧したようだが、魔法モードでは動作しなくなってしまった。

どうしようもないので木陰の長さで恒星の高さで大体10時くらいだろうという目安を付けてセットする。

さて、現在位置は不明。どこかの小高い丘の上で寝ていたのは確か。武器は拳銃一丁と予備弾倉4つ。食料は3日分の非常食、救急セット付属の浄水キットのみ。

魔法の通信機はただの通信機に、出力は低いので山に登るか近くを救難機が飛行するかしなければ救助される望みはない。

見渡す限りの草原。とにかく飲料水を確保しなければならない。立ち上がり、気付く。遠くで何かが倒れている。

何かの手がかりになるかもしれない。

そう思い、まずは謎の物体の方へ歩き始めた。

世界の裏側で愛を叫ぶ

爽やかな風が頬を撫でる。

うつすらと目を開けると、澄み渡る空と純白の雲が鮮烈な色彩を放ち、周囲では青々とした草原が吹き抜ける風で波打っている、どこか郷愁を呼び起こす光景を見ながらぼんやりと自分の体へと視線を落とす。

いつもより胸が膨らんでいる。

同時に、モゾモゾと何かが肌を這い回る感覚。

倒れている何かに大分近づいたとき、突如それが爆発した。とっさに身を伏せ、爆発した地点の様子を窺う。

微かに聞こえる悲鳴と絶叫。

その中に、聞き覚えのある声。

守るべき対象、みんなのアイドルである魔法少女の悲鳴。

「ローズ！」

その場から立ち上がり悲鳴のする方向へ一気に駆け出す。

ホルスターから拳銃を抜き、撃鉄を起こす。

アドレナリンが全身の感覚を研ぎ澄ませ、筋肉を躍動させる。

煙の中にローズの姿を認め、あと数メートルという所で違和感を感じた。

頭上に気配を感じる。

とっさに足からスライディングし、そのまま気配の元へ銃口を向ける。

まさに頭上から一直線に落下してきた燃え盛る塊に、瞬時に5発連射する。全弾命中。

燃え盛る物体の軌道が変わり、5メートルほど離れたところに落ちていく。

次に襲い来るであろう爆風からローズを守るため、自らを盾として気絶しているローズに覆いかぶさり迫りくる爆風に備える。

だが、次にやって来たのは爆風ではなく草原中に響き渡る叫び声だった。

「酷いじゃないか！ボクを殺す気か！」

うさぎが怒りの声を上げる。

ポフンという音とともに毛が生え代わり、黒焦げから真っ白な姿に変わったが、着用していた防弾着には5つの鉛玉が食い込んでいる。

「落ちてくるお前が悪い。おかげで貴重な弾を無駄にした。」

「それが仮にも護衛対象に掛ける言葉？」

未だ気絶したままのローズを担ぎ上げ、片手で近くに転がっていたトラベルセットをひろい上げ、日陰を求めて木立に向かって歩き出す。

「それで、ここはどこだ？」

「酷いやつだよ全く。ローズが起きてたらさっきの奴を食らわせて

やるのに」

「それで、どこなんだ。」

主水の問いに、そんなこともわからないのか筋肉馬鹿め、といわんばかりの溜息をついて答える。

「少なくとも僕たちがいた星と同じだよ。」

「なら話は早い。さつさと知恵の樹を使って救助を要請しろ」

「言われなくても・・・」

突然言葉を切り、ウサギが立ち止まる。

主水も立ち止まり、ローズを肩に抱えたまま振り返る。

「どうした？」

「それが、何と言ったら良いのか……」

ウサギはブツブツとひとり言を呟く。

ローズも目を覚ましかけているのか、むにゃむにゃと寝言を呟いている。

ようやく区切りがついたのか、再びウサギが顔を上げる。

「やっぱりそうだ。ここは世界の裏側だよ。」

「世界の裏側？」

「魔法の力の源泉、魔力がどこから来るか知ってる？」

ウサギが真剣な顔で主水に尋ねる。

「この星のマントルが流動してマジカル鉱物で出来たコアとの摩擦で生じる力場だったと記憶してるが。」

この星では魔力は普遍的なものであり、地球上でいう所の磁場のよ
うなものである。

そして、この星のすべての物質はある程度魔力に作用する性質を持
っている。

箒で空を飛べたり杖で魔法を制御できるのはそのためだ。

現在は科学技術の応用でより効率的で安全な利用が出来るからとっ
くに廃れたが。

「もつと簡単に言えば、魔力は風で、人間はそれを受けてエネルギー

「を生み出す風車さ。」

再び木陰に向かって歩きだす。

「人間は魔力の流れをエネルギーに変換する発電機で、使い魔が制御装置ということだったか。」

「そう。契約によって使い魔を通して知恵の樹とリンクしていることで、魔法の制御をよりスムーズに行えるのさ。まあこれは昔の話で今は科学技術の方が効率はいいけど。だけど今は知恵の樹にリンクできない。」

「なぜだ？」

「さっきの爆発みたでしょ？あれ本当は護身用の火花が飛び出る程度の魔法なのにその上位の爆炎魔法と同じ効果になってる。ここは魔力が強すぎて知恵の樹の信号を拾えないんだ」

「それが何で裏側なんだ？」

「ややこしい話になるけど、魔法の力場の仕組みについてはまだ完全に解明されてないんだ。使い魔も人間も、使えるから使ってるというだけで、もっと高次元の存在なのか、あるいは全く未知の性質を持っているのか、とにかくボクらにとっては魔法という形で利用できるだけさ。」

「だけど、数年前に古代魔法書の解読をしていたら、魔力を用いてブラックホールの様に時空を歪ませる術式が見つかり、研究者たちが色めき立つという出来事もあった。」

「結局、詳細な検証を前に技術的なミスで魔方陣を記した羊皮紙が損傷したため解読は不能という結論が出ていたが。」

「結局ブラックホールが生成できるのかわからなかったけど、まだ読める部分を解読してみたら、勇者が先導役となり大魔導師が全ての源泉たる裏側の世界への扉を開きすべてを書き換えるとか書いてあったらしいよ。」

「勇者と魔法使いが大活躍するファンタジーか。まったく嫌になる、そう思っ頭を振る。」

その瞬間、全てを思い出した。そう、自称勇者。あの変態誘拐犯を追いつめて拘束したときにローズが突然

「ちよつと待て。まさかコイツが大魔導師になってここへの扉を開いたわけじゃないだろ？」

主水の肩に担がれていたローズが苦しそうな声を出し、荷物をウサギに投げとお姫様抱っここの形にする。

「それは、良く解らないけど」
飛んできた荷物を空中でキャッチする。

「とにかく魔法はあまり使わせない方が良い。さつきみたいに何が起るかわから無いし、実力以上の魔力の使用は体への負荷が大きすぎる。」

主水の腕に抱かれたローズは再びすやすやと寝息を立て始めた。それを見てウサギがため息をつく。

「本当に寝顔はかわいいんだけどなあ。なんでわがままで天然な性格何だか…」

「天然じゃなくてコイツみたいなのはこういうんだ。えーと、そう、スィーツとか何とか」

そういいながら、じーっとローズを見つめるウサギの顔を見て先程の爆発の原因が思いついた。

「まあコイツも寝ている時はいつも無防備だ。多少イタズラしてもバレないよな」

「そう！ そうなんだよ。いつもはバレないんだけどさつきは失敗したな。せつかく服の中まで侵入できたのに急に目を覚ま・・・」
しまった、という顔でウサギが凍り付く。見え透いたかまかけに引っかかった。

次の瞬間、予想通り主水の鉄拳制裁ならぬ足蹴りを食らい吹っ飛ばされる

・・・が、いつもと違ってあまり痛くない。

地面を転がりながら反転し、先程まで自分たちがいた場所が目に入

る。

地面に金色に輝く矢が突き刺さり、その向こう側でローズが木にもたれかかり、主水が空に向かって拳銃を構えている。

「見いいいつけましたよお…マアアアイ・スイイイイイイイイイ
イト・ハアアアアアアアアアアアアアアアアト!!!」

草原に絶叫がこだまする。振り向くと、大木の上に金ピカに光り輝く鎧を身に着けた自称勇者が満面の笑みで弓を引いていた。

まさかこれがさっき言った勇者か？

うんざりとした目で主水が語りかけてくる。

ウサギもうんざりと首を振る。そうだとしても、こっちからお断り
だなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9827s/>

リリカルマジカルSFでGO！

2011年10月9日01時41分発行